

第二章 光る源氏の物語 六条院と冷泉院の中秋の宴

[第一段 女三の宮の前裁に虫を放つ]

秋ごろ、西の渡殿の前、中の堀の東の際を、おしなべて野に作らせたまへり(殿は宮の御意向で、秋になって西の渡り廊下前の庭から、町境の中の堀の東際までを一面の野原の趣向に作らせなさいました)。「秋ごろ」という語り出しは、一章冒頭の「夏ごろ」に続く順序だった話の進め方。また、「西の渡殿の前、中の堀の東の際を」という説明の仕方は何時になく具体的な分かり易さで、こういうことが偶にあるのも妙に注意を引く。ところで、この文の主語だが、庭を作り変える、ということになると、やはり殿の裁断になるかと思うが、この辺の西の対側は宮の所管区なので、模様替えは宮の意向に沿うか汲むかしたもの、に違いない。

閑伽の棚などして(お供え棚などを設けて)、*その方にしなさせたまへる御しつらひなど(如何にも仏道修行然とした宮のお部屋模様などは)、いとなまめきたり(とても優美です)。*「そのかたに」はく仏道方面の生活に。>と注にある。

御弟子に(みでしに、宮の門弟として)従ひきこえたる尼ども(従い申し上げる尼僧たちは)、御乳母、古人どもは、さるものにて(乳母や古く仕え申して来た年配の女房たちは順当なこととして)、若き盛りのも(若い盛りの女房でも)、心定まり(世俗との離縁に決心がついて)、さる方にて世を尽くしつべき限りは選りてなむ(仏道に余生を捧げる覚悟のある者に限って選び出して)、*なさせたまひける(殿は出家をさせなされたのです)。*「なさせたまひける」はく主語は源氏。>と注にある。前に「明け暮れの御かしづき、そこらの女房のことども、上下の育みは、おしなべてわが御扱ひにてなど、急ぎ仕うまつらせたまひける」(一章四段)と、宮付き女房たちの進退差配を殿が任された旨の記事もあった。

さる*きほひには(宮が本格的に修行生活をお始めになる持仏開眼供養に際した当座の余勢では)、我も我もと*きしろひけれど(女房たちが我も我もと出家を競い合っていたが)、*大殿の君聞こしめして(宮にとっては屋敷の主人という関係性になった源氏殿は、それを聞き知りなさって)、*「きほひ」は「競ふ(きほふ、張り合って勇み立つ)」の名詞形、と古語辞典に説明がある。競い合い、また、その勢い、ということらしい。「勢ひ(いきほひ)」は強意の接頭語「い」が付いたもの、らしい。*「きしろふ」はく競い合う>。「しろふ、しらふ」はく~をし合う>という接尾語で、語幹の「き」が「気・期・機」あたりの<気が立つ、機を見る>という認知語のように見える。「きほふ(競ふ)」も「き」の語感に「ほふ(表面化する)」という接尾語が付いたもの、のように見える。「ほふ」という接尾語は辞書項目には見当たらないが、「にほふ(匂ふ)」の「ほふ」は「這ふ・延ふ(はふ、伸びる・拡がる)」の同語源語のような説明もあった。*「大殿の君(おとどのきみ)」は源氏殿のことだろうが、妙に他所他所しい。宮に対して、もう男君(夫)ではないので、殿(邸宅)の管理主人という客観的な表現となったもの、だろうか。こう本文に書いてあるのだから、其処まで明示しておくか。

「あるまじきことなり(それは良くない)。心ならぬ人すこしも混じりぬれば(本心からではない出家者が少しでも混じると)、かたへの人苦しう(他の人の迷惑で)、あはあはしき聞こえ出で来るわざなり(修行に不熱心との浮ついた評判が立つ元だ)」

と諫めたまひて(と多くの追従者を制止なさって)、十余人ばかりのほどぞ(十人余りの若女房だけが)、*容貌異にてはさぶらふ(尼僧姿で宮に仕え申します)。 *「かたちことにて」は<尼姿になって>と訳文にある。「容貌変はる」は<出家する。剃髪する。>と古語辞典にある。

この野に虫ども放たせたまひて、風すこし涼しくなりゆく夕暮に、渡りたまひつつ、虫の音を聞きたまふやうにて、なほ思ひ離れぬさまを聞こえ悩ましたまへば、

「例の御心はあるまじきことに*こそはあなれ(常人への御好色心を入道者に向けるのは仏心に適わぬ背徳だというのに)」 *「こそはあなれ」は<(～ということ)なるだろう>という客観推移よりは<なるというのに>という主観反意の語感。

と(と入道宮は殿のお渡りを)、ひとへにむつかしきことに思ひきこえたまへり(ただただ煩わしいことと思ひ申し上げなされたのです)。

人目にこそ変はることなくもてなしたまひしか(人目にこそ以前と変わることもなく優しく接して下さっているが)、内には憂きを知りたまふけしきしるく(内心では故衛門督との密通を嫌悪していらっしゃる態度がはっきりあって)、*こよなう変はりにし御心を(すっかり変わってしまった殿の御心を)、いかで見たてまつらじの御心にて(何とかして押し申さずに済むようにとの宮の御心で)、多うは思ひなりたまひにし御世の背きなれば(産後の肥立ちの悪さを口実に、ほとんどそうお考えになっての御出家なので)、今はもて離れて心やすきに(今はもう共寝も無しに安心しているのに)、 *「こよなう変はりにし御心」について、注に<源氏の心。女三の宮への愛情。愛情のない執心のみが依然として続く。しかし、愛情は最高の概念ではない。>とある。是は渋谷教授本人の注記だろうか。少なからず驚くべき意見表明だ。「愛情」は日常的には<事物を大事に思う気持>くらいに語用される。「最高」は<主要なものとする評価>くらいの言い方だ。が、「概念」という抽象論を語る時には、「愛情」のどういう成分・性質・動向などの焦点について、どういう価値基準に於いて「最高」なのかを、定義して、立証しなければ、何を言っているのか分からないし、到底何の説得力もない。そうした論拠も無しに「愛情は最高の概念ではない」という一般意見を注釈として記すという不遜さは罪深く思える。確かに一般論として、「愛情」が「社会規範」を逸脱する場合の困難などというものは人間社会に付き物のような気はするが、その場合でも、感情論としてではなく、「概念」なる客観評価として「最高」とか「最低」などという言い方をするには、傍証揭示を添えた一大論文が必要だ。逆に言えば是は、その作業を上手く仕上げれば売れる小説をものにすることが出来るかも知れない、というほどの主題だ。ましてこの物語は、天皇家および天皇位に近い周辺事情の日常生活が描かれていて、ということは私的な事柄も公的な意味を相当程度に帯びるのであり、それらの事物に対する評価に於いて、試案提示はともかく、客観断定にはよほど慎重な態度があって然るべきだ。それも、専門家であれば一層の厳しい態度が課される筈だ。非常に心外な注で、と言って無視できずに、この注のために時間と思考を費やさねばならないのは、ちょっとした事故遭遇感がある。被害状況を調べると「愛情のない執心のみが依然として続く」ともあり、是は<肉欲は無いが体面を施すための関係性の持続に拘る>と解せば、如何にも宮の存在自体の否定のような殿の自分本位の身勝手姿勢みたいな印象だが、帝の妹宮であり兄院の娘という宮の身分の社会性は当然に強く意識しているようだが、殿は個人的にも、かつては姪としての可愛さを人形視していた節があったものが、この持仏開眼法会に及んで宮が「隔てなく蓮の宿を契りても君が心や住まじとすらむ」(和歌 38-02)と意地を見せた事が、殿をして微妙に妻と見ての相手のし甲斐を意識させた向きもあるかの語り口だ。そうした「微妙さ」は本文の通りに受け止めるのが素直な読者の読み方なのではないか。殿が宮の密通に拘っているのは間違いないし、確かにそう書かれているし、それは広く無理の無い感

情と受け止められるような気はするが、その一面だけでは済まない人間模様を作者は表現しようと努めているのだろうし、既に述べたが、源氏殿は高位の公人であって、その私的な言動の社会的な意味を考えるのは興味深いし、意義深いと思うが、本文に「愛情」や「執心」が語られてもいない場面なのに、それらの語を一般化した語用で論じる姿勢は厳に慎むべき、と重ねて思う。

「なほ、*かやうに(まだそのような、お情けごとを)」 *「かやうに」殿が「思ひ離れぬさまを聞こえ悩ましたまふのは、体面も然り乍ら、宮の自己主張に殿が宮の存在感を見直した、という側面もあるようだ。が、宮の自己主張は出家なのであり、それが残されたほぼ唯一の解決方法だった、という事情なのだろう。宮は源氏殿の妻を勤めるには力不足だと自覚していた、のだろう。しかし、その社会的身分がその責務を強要した。子供の宮が妻として夫たる大人の源氏殿に伍すのは、実際に全てを教えてもらう関係に於いて、到底無理であり、この結婚は無謀だった。いや、必ずしも年齢差のある結婚が現実味が無いということではないだろうが、この場合は如何にも釣り合わなかったようだ。密通が無くても宮は不幸だった。が、不義と不義の子が問題を顕在化させた、とは言えるのかも知れない。解決策は離縁だったが、それが互いの立场上困難であり、残された逃避策が出家だったようだ。事実上の婚姻解消で、宮はやっと息が吐けて、少しは意地も見せたが、またそれを殿は面白がったようだが、宮にとっては殿は初めから煙たいオジサンであり、妻の重責を逃れて初めて伍せる立場になれたものの、基本的な人間関係に於いて、殿は目上の人であり、強がりも背伸びしてのこと、という気詰まり感は変わらない。嫌う、というよりは、逃げたい、というのが宮の本音のように見える。

など聞こえたまふぞ苦しうて(などと殿の未練にお応え申しなさる事が辛くて)、「人離れたらむ御住まひにもがな(殿と離れて暮らしたい)」と思しなれど(とお思いになるが)、*およすけてえさも強ひ申したまはず(出家なさっても自立者然と其処まで強くは申しなさいません)。 *「およすく」は<成長する。成人する。>または<大人ぶる。ませる。>などと大辞泉にある。

[第二段 八月十五夜、秋の虫の論]

十五夜の夕暮に(十五夜の月の出を待つ夕暮れに)、*仏の御前に宮おはして(仏壇の御前の西廂に宮はいらして)、端近く眺めたまひつつ念誦したまふ(縁側近くで庭先の様子を気に掛けつつ読経なさいます)。*若き尼君たち二、三人(縁側では庭先のお供え棚に若い尼弟子たちの二、三人が)、花奉るとて鳴らす*闕伽坏の音(花を仏にお供え申し上げようと立てる水汲みの音や)、水のけはひなど聞こゆる(注がれる水音などが聞こえるという)、さま変はりたるいとなみに(以前とは違う仕え方に)、*そそきあへる(立ち働いていたのが)、いとあはれなるに(実に感慨深いという風情の頃合いに)、例の渡りたまひて(殿が例によってお渡りなさって)、 *「ほとけのおまえ」は此処までの話から辿ると、どうも西廂に当たるような気がする。一段初行にも「西の渡殿の前」を野辺風に整備したとあった。であれば、この「はしちかう」は<西の渡殿近く>という感じ。 *「若き尼君たち」とは誰なのか。「あまぎみ」とは<身分ある尼に対する尊称>と古語辞典にあり、宮に仕える<若い尼弟子>とは言えないのかも知れない気もするが、「花奉るとて鳴らす闕伽坏の音」という描写には敬語が無く、作業も弟子の役目のようなので、一応<若い尼弟子>として置く。 *「闕伽坏(あかつき)」は<水を入れて仏に供えるのに用いる器。銅製が多く、土器もある。>と大辞林にある。 *「そそきあへる」は「そそきあへり(そそくさと立ち働いていた)」の連体形でくそうしていたのが>という主語格を意味する。また、「そそきあへり」は、「そそく(忙しくする。そそくさと捌く。)」の連用形に「あふ(敢ふ、敢行する・異種の仕事を敢えてこなす)」が付いた「そそきあふ」の連用形に動作説明の助動詞「り」が付いた語。「そそく」は水の縁語の「注く」に掛けた言い方なのだろう。

「虫の音いとしげう乱るる夕べかな(虫がとても多く鳴き乱れる夕べですね)」

とて、われも忍びてうち誦じたまふ阿弥陀の*大呪(と言って御自分も低く唱えなざる阿弥陀経の呪文は)、いと尊くほのぼの聞こゆ(とても有難く静かに響きます)。げに(確かに)、声々聞こえたる中に(いろいろな虫の声が聞こえる中で)、鈴虫の*ふり出でたるほど(鈴虫の鳴き声は)、はなやかにをかし(華やかで興がある)。 *「大呪(だいにず、だいにじゆ)」は<「陀羅尼」の敬称。>と古語辞典にある。「陀羅尼(だらに)」は<梵文(ぼんぶん)を翻訳しないままで唱えるもので、不思議な力をもつものと信じられる比較的長文の呪文。陀羅尼呪。呪。>と大辞泉にある。「阿弥陀の大呪」は<阿弥陀経の呪文>らしい。 *「振る」は「鈴」の縁語、と注にある。

「秋の虫の声、いづれとなき中に、*松虫なむすぐれたるとて(秋の虫の声は何れ劣ると無き中で松虫が優れているということ)、中宮の、はるけき野辺を分けて、いとわざと尋ね取りつつ放たせたまへる(冷泉院の中宮が遠くの野辺を分け入ってまで、わざわざ探し取らせて庭へ放させなされたが)、しるく鳴き伝ふるこそ少なかなれ(はっきりと聞き取れるように鳴くものは少ないようだ)。名には違ひて(長寿の松にあやかた名前とは違って)、命のほどはかなき虫にぞあるべき(寿命の短い虫なのだろう)。 *「松虫(まつむし)」は<今のスズムシ。秋の夜リーンリーンと澄んだ声で鳴く。>と古語辞典にある。

心にまかせて(松虫は自由に)、人聞かぬ奥山、はるけき野の松原に、声惜しまぬも(人が聞きつけない山奥や広い野原の松原で盛んに鳴くものの)、いと隔て心ある虫になむありける(人の近くでは人見知りして遠慮する虫のようですね)。鈴虫は、心やすく、今めいたるこそらうたけれ(その点、鈴虫は人馴れして騒がしいのが親しめます)」

などのたまへば(などと殿が仰ると)、宮(入道宮は)、

「おほかたの秋をば憂しと知りにしをふり捨てがたき鈴虫の声」(和歌 38-03)

「物寂しげな秋の夜に鳴く鈴虫の華やかさ」(意識 38-03)

*注に<女三の宮から源氏への贈歌。「秋」と「飽き」の掛詞。「鈴」「振り」は縁語。『完訳』は「源氏の「鈴虫は一」を受け、庭に虫を放つなどの源氏の厚志に感謝しながらも、自分を飽きた源氏への恨みを言い込めた歌」と注す。>とある。ただ、一義的には「恨み」というよりは、殿の「飽き」を承知の上の「秋」の夜に、うるさく言い寄る「鈴虫」みたいな殿への<皮肉>に見える。尤も、殿の見限り(=飽き)を受け止めて出家したというのに、その殿の未練を「ふり捨てがたき」厭世観への<恨み>ではあるのかも知れない。

と忍びやかにのたまふ(と静かに仰るのが、)。いとなまめいて(とても優美で)、あてにおほどかなり(上品でおっとりしています)。

「*いかにとかや(是はまた何と)。いで、思ひの外なる御ことにこそ(いや、心外な御歌詠みをなさる)」とて、 *「いかにとかや」は注に<以下「御ことにこそ」まで、源氏の詞。『完訳』は「宮の歌の「飽き」への反発」と注す。>とある。殿の「飽き」が不義の遠因という見方もあるとは思いますが、それを言うなら、やはりこの結婚を決めた朱雀院の判断こそが宮の不幸の始まり、とさえ言えるのであって、その責を朱雀院自身も自覚

したからこそその御自身の六条院へのお出向きと、宮の剃髪式の断行があったのだろう。それは背景として踏まえた上で、此处での宮の歌詠みは、憎まれ口を利いた、くらいの軽さとして見ないと楽しく読めない。殿に反発があるとすれば、宮に似合うと思って作った鈴虫の野を、宮側では殿が鈴虫だと陰口しているらしく宮が仄めかしたこと、にあるように思う。

「心もて草の宿りを厭へどもなほ鈴虫の声ぞふりせぬ」(和歌 38-04)

「そんな厭味も好い声で鳴く鈴虫の愛らしさ」(意識 38-04)

*注に<源氏の返歌。「振り」「鈴虫」の語句を受けて、「声ぞふりせぬ」あなたは昔どおり若く美しい、と返す。「振り」「古り」掛詞、「鈴」「振り」縁語。「草のやどり」は六条院、「鈴虫」は女三の宮を喩える。『完訳』は「源氏には、「心やすく、いまめい」た鈴虫が、女三の宮の美質として顧みられる。秋虫を放った六条院庭園は、執心を捨て得ない源氏的心象風景たりうる」と注す。>とある。「心もて」は<自分の心を以て=自分の判断で>だから、殿は、宮が出家を殿の「飽き」の所為だという言い方をしたことに対して、出家は飽くまで宮自身の判断だった、と言いつけている。此处で言う「出家」を二人の間では<不義密通>という語に置き換えて詠み合っているかに見える。「なほ」は、六条院を嫌っても<今なお>あなたは此处に居る、という響き。当然、殿が言う「鈴虫」は<宮>を指す。イヤラシサでは宮は殿に及ばない。

など聞こえたまひて(などと殿は返歌申しなさって)、*琴の御琴召して(七弦古琴を持って来させて)、珍しく弾きたまふ(久しぶりにお弾きなさいます)。宮の御数珠引き怠りたまひて(宮は念誦回数を数える数珠玉繰りを忘れなさって)、御琴になほ心入れたまへり(御琴の音に一層聞き耳をお立てになります)。 *「きんのおんこと」は<七弦古琴>。

月さし出でて(月が出始めて)、いとほなやかなるほどもあはれなるに(とても明るくなって来る見事な風情に)、空をうち眺めて(お月見をすれば)、世の中さまざまにつけて(世の中のさまざまな出来事が)、はかなく移り変はるありさまも思し続けられて(留まること無く移り変わる実際の有様が次々と思ひ浮かばれて)、例よりもあはれなる音に搔き鳴らしたまふ(普段以上にしみじみとした音でお弾きになります)。

[第三段 六条院の鈴虫の宴]

今宵は、例の御遊びにやあらむと*押し量りて、兵部卿宮渡りたまへり(今夜の恒例の十五夜演奏会に丁度良い頃合いだろうと見計らって兵部卿宮が六条院にお見えになりました)。 *「押し量りて」はどのくらいの語感なのだろうか。この文の通りに解せば、特に問題がなければ六条院に主だった面々が集って演奏会があるのが毎年の恒例になっていて、六条院からは何の案内も無しに、また来訪者は確認も無しに、それぞれが思い思いの時間や出で立ちで出向いた、というような感じだ。が、大前提に、主だった面々は日頃の付き合いがある連中であり、「特に問題がなければ」という認識はそうした付き合いの中で得られる情報に他ならない、ということだ。だから、公式行事ではないから時間や様式に堅苦しい決まりは付けないものの、緩い打ち合わせがあった上での来訪というのが実際の事情に違いない。その上での「押し量りて」は、演奏会の開催は事前確認が出来ていて、またおよその時間も慣行通りという共通認識がある上で、自分なりに来訪の頃合いを見計らう、という意味になるかと思う。

大将の君(大将の源君も)、殿上人のさるべきなど具して参りたまへれば(殿上舎人の音楽好きを伴って参上なさったので)、こなたにおはしますと(殿が宮のお部屋にいらっしゃるといこと)、御琴の音を尋ねて(その御琴の音を頼って)、やがて参りたまふ(そのまま寝殿の西側南廂前に進みなさいます)。

「いと*つれづれにて(ただ気の向くままに)、わざと遊びとはなくとも(格式張った演奏では無くても)、久しく絶えにたるめづらしき物の音など(暫く絶えていた面白い楽器演奏を)、聞かまほしかりつる独り琴を(聞きたくて弾いていた独り琴を)、いとよう尋ねたまひける(ちょうど良い頃合いに聞きつけて下さった)」 *「つれづれ」は「徒然」と漢字表記され<退屈なさま。手持ち無沙汰。>の意味で使われることが多い語らしい。が、此処の「いとつれづれにて」を<ととも退屈なので>と言い換えると「物の音など聞かまほしかりつる(何か演奏を聞きたいと思っていた)」に漠然とは繋がるが、この日の演奏会が私的なものながら、それなりに予定されていたであろう事情からすると、もっと必然性を持って「独り琴」に繋がる言い方でなくては不自然だ。で、少し「つれづれ」の語感を考えてみるに、「徒(ト)」は「あだ、いたずら」などの訓読みから類推するに、事態が進むままに=なすがままに=工夫も無しに=意図も無く、みたいな語感だ。「然(ゼン)」は<様態、状態>を示す語感。「徒然」は<あるがままの状態>みたいな語感。そして何より、「つれづれ」は「連れ連れ=継続性」の意と辞書に説明があり、ざっと<あるがままの状態が続いている>語感で、この場面の意味としては<ただ気の向くままに>で「独り琴」に掛けるのが馴染む気がする。

とて(と殿は仰って)、宮も、*こなたに御座よそひて入れたてまつりたまふ(入道宮も此方の南廂の御簾内に御座を用意してご案内申し上げなさいます)。 *「こなた」は南廂なのだろう。やはり宮は西廂で念誦なさっていて、南廂の客間へ移ったらしい。が、殿と歌の贈答をしたのは西廂だったのだろうし、南廂も当然に御簾内で客人たちは縁側か、廂内でも御簾外に違いない。

内裏の御前に(うちのおまへに、御所で)、今宵は月の宴あるべかりつるを(今宵は月見の宴が催される予定だったのが)、とまりてさうざうしかりつるに(中止になってつまらなかった)、この院に人びと参りたまふと聞き伝えて(代わりにこの六条院に主だった人々が参上して月見をなさると伝え聞いて)、これかれ上達部なども参りたまへり(他の高官たちも参上なさったので)。 *注に<宮中の帝の御前における八月十五夜の月の宴が中止となる。その理由は語られていない。>とある。段頭の「今宵は、例の御遊びにやあらむと推し量りて、兵部卿宮渡りたまへり」という文のネタバレの趣きで、こんな形で私の解釈に側面援護を受けるのが意外で驚きと面白さを覚えたが、それにしても御所宴会の開催中止の理由は何なのだろう。どういう場合に中止になるのだろう。桐壺女御や紫の上の話も出て来ないし、少し不思議な気はしていたのだが、入道宮や殿が平常に暮らしているということは、不幸や不都合があったというよりは他用があった、と思うべきなのだろう。それでも、宮や殿が関わらないことで、帝が月見開催を中止する他用とは何なのだろう。「理由は語られていない」のだから拘っても解は無いが、特に紫の上の近況およびこういう場での殿との関係性については、病後は一線を退いたらしいものの、やはり気になるところだ。

虫の音の定めをしたまふ(月見の座では誰かれと、虫の音の品定めをしなさいます)。御琴どもの声々掻き合はせて(やがて弦楽器類の合奏が始まって)、おもしろきほどに(座の興趣が乗ってくると)、

「月見る宵の、いつとてもものあはれならぬ折はなきなかに(お月見の晩は何時と言って印象深くない時は無い中でも)、今宵の*新たなる月の色には(今夜の差し出した月の色には)、げになほ(漢詩に故人が偲ばれるとあるように、如何にも一層)、わが世の外までこそ(現世を離れた人のことまで)、よろづ*思ひ流さるれ(いろいろ思い出が流れ出されます)。 *「あらたなるつきのいろ」は注に<「三五夜中新月の色二千里の外故人心」(白氏文集、八月十五夜禁中独直対月憶元九)。>と引用指摘がある。この漢詩は白居易のものの中でも有名な一首らしく多くの解説サイトがある。題は「八月十五夜に禁中に独直して対月し憶う元九」と読むらしく、「禁中(キンチュウ)」は<皇帝城>、「独直(ドクチョク)」は<単独宿直>、「対月(タイゲツ)」は<月を見る>、「憶う」は<思う>、「元九(ゲンキュウ)」は<友人の名前>、とのこと。詩文構成は七音八句(七言律詩)。七言律詩は主題に関して、一句の事物提示に対して二句が感想述辞、三句の提示に対して四句の述辞、五句の提示に六句の述辞、七句の提示に八句の述辞、となり、二句・四句・六句・八句の末語音韻と全体の意味で詩情を謳うということらしく、引用は三句と四句の対句部のようだ。即ち、「三五夜中新月色」にして「二千里外故人心」なる、という意味を成す。「三五夜(サンゴヤ)」は $3 \times 5 = 15$ で<十五夜の符牒>らしい。「中(チュウ)」は格助詞の<の>。「新月色(シンゲツシヨク)」は、是が問題なのだが、「新月」は<朔月=ついたち>のことではなく、本文にもある通りに「あらたなる月」のことで、この「あらた(新)」は<新鮮な、始まったばかりの>という語感で此处では<差し出した>という言い方、かと思う。「二千里外(ニセンリガイ)」は<はるか遠く離れた>。「故人(コジン)」は詩文では亡き人ではなく<旧友>の意らしいが、本文ではむしろ<亡き人=故衛門督>を意識した引用語用なのかも知れない。「心(シン)」は<偲ぶ、思う>。詩全体の主旨は、自分は宮中で見事な月に権力の威容を実感しつつも不遇にある旧友が苦節に負けないのを祈るばかりだ、という宮仕えの悲哀が滲むような趣き、のようだが背景事情に対する知識が私には乏しく、共感までは覚えない。が、この詩は須磨巻三章二段の殿自身の不遇の折にも引かれた、との指摘も幾つかのサイトにあるように、当時の人々には常識だったようだ。 *「思ひ流す」は<思いを流し去る>という場合もあるようだが、此处では<思い出が流れ出る>ということらしい。

*故権大納言、何の折々にも、亡きにつけていとど偲ばれること多く(故権大納言が何の折々にも故人である事がますます惜しまれることが多く)、公(おほやけ)、私(わたくし)、ものの折節のにほひ失せたる心地こそすれ(宴席の華やぎが失われた気がする)。 *「故権大納言」は「こだいなごん」とローマ字文にある。「ごんの」が抜けているのは、写本に「権」が無いのかと思ったが、東京国立博物館の保坂本の画像サイトには「こ権大納言」(鈴虫 15/27)、京都大学本には「故権大納言」(v. 36, p. 026)とあって、読みは<こごんのだいなごん>が正しいのではないか、と思われる。

*花鳥の色にも音にも(風情を楽しむにも)、思ひわきまへ(素養教養があつて)、いふかひあるかたの(話し甲斐のある)、いと*うるさかりしものを(優れた一家言人だったものを) *「はなとりのいろにもねにも」は注に<「花鳥の色をも音をもいたづらにももの憂かる身には過ぐすのみなり」(後撰集夏、二一二、藤原雅正)>と引歌指摘がある。「はなとり」は<花鳥風月の趣き=風雅な趣を楽しむこと。風流韻事。風流。(大辞泉)>の意だろう。 *「うるさし」は<語らせれば喧しいほど止め処無く豊富な知識がある=事物に詳しい=造詣が深い>。

などのたまひ出でて(などとお口に出されて)、みづからも搔き合はせたまふ*御琴の音にも(御自身も和琴を手にして演奏を合わせなされる御琴の音にも)、袖濡らしたまひつ(殿は故権大納言を懐かしんで涙を滲ませなさいました)。御簾の内にも(御簾内の入道宮にも)、耳とどめてや聞きたまふらむと(故権大納言を偲んで耳を留めてお聞きになるだろうか)、片つ方の御心には思しながら(一方では憎らしくお考えになりながら)、かかる御遊びのほどには(こうした御催しの際

には)、まづ恋しう(真っ先に恋しく)、*内裏などにも思し出でける(帝におかれても故権大納言を思い出しなされたということです)。*「おんことのねにも」の文意は注にく柏木は和琴の名手であったことを回想。>とある。従いたいのでく和琴>を補語明記する。*「うちなどにも」がこういう文脈で語られる身分認識が良く分からない。帝は入道宮の兄ではある。が、帝は天主だ。日本の組織機構に於いて、または一般組織論としてもかも知れないが、一定の組織機構を創成した初代以外の主は絶対権力者ではなく、組織構成員の共有価値観を象徴体現する存在だ。が、それだけに組織持続を補佐する要人は、その権威を絶対犯さざるものと心しなければならぬのではないのか。実態がいくら普通の家族関係であったとしても、対外的な言い方として、こうした実和風の物語に於いて、「思し出でける」という軽い尊敬表現で良いのだろうか。何か意図がある言い方に見えてしょうがないが、その意図が分からず、気持ち悪いままだ。

「今宵は*鈴虫の宴にて明かしてむ(今夜は音を競う鈴虫の宴ということで夜を明かそう)」*「すずむしのえん」とは何か。ざっと、音を競う演奏会、と取っては置くが、上文の「内裏などにも思し出でける」との兼ね合いが何かありそうな気がしてならない。何か無ければ、この「鈴虫の宴」という言葉に面白味が味わえない。が、不明な隠語のままで私には味がしない。尤も理屈で読めば「鈴虫の宴」での<鈴虫=故権大納言>という殿の追善の思いは「故権大納言、何の折々にも、亡きにつけていとど偲ばるる」と語られていて、その思いを座で共有するために「内裏など」を引っ張り出した、とは言えるのかも知れない。が、それでは余りにも作者の自己満足本位な論理展開で、それも当時の女房の生活感の実態の現れかも知れないが、遠く雲上世界を眺める現代の一読者としてはむしろ引くので、御所での月見中止と併せて、当時の宮廷読者にしか分からない逸話が何かあった、と思う方が楽しい。拠って<音楽に造詣の深かった故衛門督を偲ぶ鈴虫の宴>とは敢えて言わない。

と思しのたまふ(と殿は発案なさり仰います)。

[第四段 冷泉院より招請の和歌]

御土器(おんかはらけ、御酒盃が)二わたりばかり参るほどに(二順した頃に)、冷泉院より御消息あり(冷泉院から御連絡の御使者がありました)。

御前の御遊びにはかにとまりぬるを口惜しがりて(御所でのお月見が急に中止となったのを惜しんで)、*左大弁(さだいべん、藤左大弁が)、式部大輔(しきぶのたいふ、式部省次官や)、また人びと率ゐて(他の者たちを連れて)、さるべき限り参りたれば(主だった者が参ったというのに)、大将などは六条の院にさぶらひたまふ(大将などは六条院にいらっしゃる)、と聞こし召してなりけり(とお聞きになってのお誘いなのでした)。*「左大弁、式部大輔」は<左大弁は、柏木の弟、後の紅梅大納言。式部大輔は系図不詳のここだけに登場する人物。>と注にある。

「雲の上をかけ離れたるすみかにも、もの忘れせぬ秋の夜の月 (和歌 38-05)

「御所には遠い我が家にも、十五夜の月は出ています (意識 38-05)

*別にこつてりとした修辞は無い句、なのだろう。むしろ、あっさりとした案内状であるところに、この句の味わいがある、と取って置く。

*同じくは(どうせなら、此方でご一緒しませんか)」 *注にく「あたら夜の月と花とを同じくはあは

れ知れらむ人に見せばや」(後撰集春下、一〇三、源信明)。ここに見に来ていただきたい、の意。>と引用指摘がある。

と聞こえたまへれば(冷泉院がお招き申し下されたので)、

「何ばかり所狭き身のほどにもあらずながら(何も私は億劫がるほど堅苦しい立場でも無いものを)、今はのどやかにおはしますに(冷泉院が今はゆっくりとお過ごしなのだろうと遠慮申し上げて)、参り馴るることもをさをさなきを(気軽に参上申すことも全く無いのを)、本意なきことに思しあまりて(心外に御思いの余り)、おどろかさせたまへる(こんな急なお誘いで驚かせあそばすとは)、かたじけなし(勿体無い仰せ)」

とて(ということで)、にはかなるやうなれど(如何にも急な話だが)、参りたまはむとす(殿は冷泉院にお出向きなさることにします)。

「月影は同じ雲居に見えながら、わが宿からの秋ぞ変はれる」(和歌 38-06)

「月は雲居にあるものと、お招き感謝いたします」(意識 38-06)

*注に<源氏の返歌。「月影」は冷泉院を喩える。「試みに他の月をも見てしがなわが宿からのあはれなるかと」(詞花集雑上、二九九、花山院)。>とある。「やまとうた」サイトの「千人万首」トピックの「花山院(かざんのいん、968～1008)」ページによると、この引歌は金葉三奏本(金葉和歌集 1127 年成立)にも収められているらしく、その詞書に「清涼殿にて月を御覧じてよませ給へる」とあり、詩句の「わが宿からの」が<内裏の清涼殿からの月見>を意味する、と解説がある。当歌の「雲居」も御所=内裏を意味し、退位したとは言え冷泉院も帝位に居たことを「月影は(天照と同じ)」という言い方で、この六条院こそ准太上天皇とは言え非帝位の風変わりな景色なので、月を愛でるに相応しい其方へ伺いましょう、という返事になっている、ということらしい。

異なることなかめれど(特に如何という御返歌ではないが)、*ただ昔今の御ありさまの思し続けられけるままなめり(殿は素直に臣下として御退位後の今も昔に変わらぬ敬意を持って冷泉院を思い続けていらっしゃるままをお示しになったようです)。*「ただ～ままなめり」は<素直に～しただけのようだ>という言い方かと思う。が、そう振舞うことの重い意味は、殿と冷泉院と読者には分かる筈、と言いたげな語り口。「御ありさま」は<冷泉院に対する殿の認識>。

御使ひに盃賜ひて(御使者に酒盃を賜わって)、禄いと二なし(褒美の品もとても立派な敬意を表したものです)。

[第五段 冷泉院の月の宴]

人びとの御車(客人たちの御車を)、*次第のままに引き直し(出発順に引き並び直し)、御前の人びと(ごぜんのひとびと、車周りの従者たちが)立ち混みて(入り乱れて)、静かなりつる御遊び*紛れて(静かに情緒を楽しんでいた演奏会は雑然とした形になって)、出でたまひぬ(一行は冷泉院に出发なさいます)。*「しだい」は<順序>。客人が三々五々帰途に着く分には、その都度門前に車を寄せれば良いのだろうが、皆が連れ立って冷泉院へ行列するとなれば、予め出立順に駐車場の車を並べ替えておかないと、

車寄せと出発で門前が大混乱する、ということなのだろう。確かに、ざっと官位の高い者順ではあるのかも知れないが、公式行事ではないのだから、ある程度は仲間内のまとまりみたいなものも許容されたのではないか。それに、厳密な順番を取り決めていたのでは時間が掛かる。その場の乗りで互いに納得すれば、それが従者に伝えられて、順番が揃えられたのだろう。*「紛る(まぎる)」は<雑然として見分けが付かなくなる→形を失う>。ただ、「鈴虫の宴=故権大納言追悼」だとすると、この雲散霧消は微妙な意味合いになる。

*院の御車に、親王たてまつり(源氏殿の御車に兵部卿宮を同乗させ申し上げ)、大将(だいしゃう、大将源君)、*左衛門督(さゑもんのかみ)、藤宰相など(とうさいしゃう)、おはしける限り皆参りたまふ(いらした全員が同道なさいます)。*「みんのみくるまにみこたてまつり」は注に<六条院の御車。源氏と蛭兵部卿宮と同乗。>とある。*「左衛門督、藤宰相」に説明は無い。ただ、故藤君を故衛門督ではなく故権大納言と呼びたくなる次世代の台頭は感じる。

直衣にて(殿は平服の)、軽らかなる御よそひどもなれば(軽装装束一式だったので)、下襲ばかりたてまつり加へて(冷泉院への礼儀として下重ねだけは着け加えなさって)、月ややさし上がり(月がもう真上に差し掛かり)、更けぬる空おもしろきに(真夜中となった月夜の明るさの中で)、若き人びと(若い貴公子に)、笛などわざとなく吹かせたまひなどして(笛などを公式の堅苦しさと違って吹かせなさったりして)、*忍びたる御参りのさまなり(私的に構えずご訪問申し上げるという体裁です)。*「忍ぶ」は<控え目にする→(公式行事ほどには)麗々しく構えない>という事かと思う。この要人たちの大行列が微行である筈も無い。

うるはしかるべき折節は(威儀を正すべき公式行事では)、所狭く*よだけき儀式を尽くして(堅苦しく仰々しい礼装で構えて)、かたみに御覧ぜられたまひ(互いに面対なさるが)、また(それとは別に)、*いにしへのただ人ざまに思ひ返りて(かつての臣下の姿に立ち返って)、今宵は軽々しきやうに(今夜は軽装で)、ふとかく参りたまへれば(俄かにこのように殿が参上なされたので)、いたう驚き、待ち喜びきこえたまふ(冷泉院はととても驚き、殿を喜んでお迎え申し上げなさいます)。*「よだけし」は「弥猛し」の漢字表記で<いかめしい。仰々しい。>と古語辞典にある。*「いにしへのただ人ざま」は注に<「いにしへ」は冷泉帝在位中をさす。源氏は准太上天皇の待遇を得たとはいうものの、皇族に復籍せず、あくまでも臣下のままである。>とある。

ねびととのひたまへる御容貌(年を重ねて落ち着いていらっしゃる冷泉院の御顔立ちは)、いよいよ異ものならず(いよいよ源氏殿にそっくりです)。いみじき*御盛りの世を(御隆盛の勢いがある若い盛りの帝位を)、御心と*思し捨てて(お考えがあつて退位なさり)、静かなる御ありさまに、あはれ少なからず。*「おんさかりのよ」は<天皇の御世=在位>。*「思し捨つ」は<此处までと見限りなさる→退位なさる>。注には<冷泉院は二十八歳で退位。「若菜下」巻に語られている。>とある。四年前の春。

その夜の歌ども(その夜に詠まれた歌の数々は)、唐のも大和のも(漢詩も和歌も)、心ばへ深うおもしろくのみなむ(情趣が深く味わいのあるものばかりでした)。例の(例によって)、*言足らぬ片端は(教養の無い中途半端な女房語りで)、まねぶもかたはらいたくてなむ(殿方の御歌などを真似てお伝え申すのは僭越かと、ご披露は差し控えます)。*「ことたらぬかたはし」は<全体を十分に説明できない事物の一部分>と言うよりは、語り手自身を<しつかり説明できるほどの教養のない中途半端な女房語り>と卑下した言い方、と取る方が言葉の言い方として馴染む気がする。注には<『集成』は「省筆をこと

わる草子地。上皇御前では漢詩を第一とするが、それは女性の口にすべきことではないからである」。『完訳』は「語り手の省筆の弁。言葉足らずの片端だけでは気がひける」と注す。>とあり、そういう女性を公式の場に認めない社会通念ないし価値観が、女房に卑下を強要しているという背景事情はあるようだ。が、作者とされる紫式部は漢学者の藤原為時の娘で、自身は漢詩文に精通していたとされるので、こういう言い方に何処か皮肉めいた響きを感じてしまう。

明け方に*文など講じて(明け方に漢詩などを朗詠して)、とく人びと*まかでたまふ(早々に客人たちは宴席からご退出なさいます)。 *「文(ふみ)」は此処では<漢詩>のことらしい。「講ず(かうず)」は<詩や歌の会で、作品を詠み上げる。披講する。>と大辞泉にある。宴会の締めには漢詩を朗詠するのは冷泉院の格式の高さを意味する、のかも知れない。 *「まかでたまふ」は宴のお開きで散会となった事の描写らしく、「人びと」は院内に残っていて、六条院源氏殿の帰宅に同行したことが三章三段に後述される。